

教育困難校は生徒をいかに学校へ取り込むのか？

—一定時制高校における生徒の仕事への意味づけに着目して—

濱沖敢太郎（一橋大学大学院）

1. 問題設定

本報告の目的は、高等学校夜間定時制課程において生徒の仕事がいかなる意味を有しているのかを明らかにすることによって、高校教育におけるメリトクラシーと若者文化の関係に関する新たな知見を提示することである。

ノンエリートをも巻き込む一元的な能力主義を特徴とする日本の高校教育（荻谷 1991 など）は、その要件であった新規高卒学卒市場の縮小と、多様化路線を一つの軸とする高校教育改革によって大きく変貌したことが指摘されてきた（樋田他 2000, 荒川 2009 など）。児美川(2006)や大多和(2008)は 80 年代末からの高校教育の変化を、個性的であることを求める価値観が政策と実践双方のレベルで取り入れられ、学校空間が若者文化や消費社会に対して有していた遮蔽性が弱まっていったと指摘する。しかし、変化の契機をこの時期に求めることは果たして妥当なのであろうか。大多和(2008)が参照する藤田(1991)は、学校、家庭・地域、工場・オフィスの三者間の境界が揺らぐ変化を 80 年代、萌芽としては 70 年代に見出しており、むしろ日本型メリトクラシーが強固に存立していたとされる時期に変化の契機があったと指摘しているのだ。

本報告ではこのような先行研究の課題をふまえて、80 年代後半から 90 年代初頭にかけて変化が指摘されてきた日本型メリトクラシーと若者文化との関係を再考する。具体的には新たなタイプの学科・コースではない学校群において若者文化と教育実践がいかなる関係にあるのかを、従来生徒の価値観と企業からの要求の間でアカウンタビリティの困難に陥っていると指摘されていた（大多和・山口 2007）教師の諸活動に対する意味づけに着目して明らかにする。若者文化と不可分な教育実践が、いかにノンエリートをも巻き込む日本型メリトクラシーを可能にしているのか、あるいは不可能になっているのかという

ことを詳細に分析する。

2. 研究方法と調査対象の概要

90年代の高校改革によって主要な再編の対象の一つとなったのが夜間定時制課程である。高い中退率や進路未決定率、不本意入学者などが問題化され、一部は新たなタイプの学校へと再編されていた学校群である。また、学校のエデュケーションと教師以外の人間や学校外の活動との関係がしばしば問題化されており、学校空間の遮蔽性を検討する上で重要な研究対象と言える。

調査対象となったのは首都圏に位置する夜間定時制課程X校（以下、X校）であり、筆者は2009年5月から2011年12月まで週2回程度の学校を訪れ、授業や学校行事、課外活動などへの参加によるフィールドノーツやインタビューでデータ収集を行った。X校は戦後学制改革期に全日制課程に併設される形で創立しており、90年代の高校改革以前から存在する普通科の学校である。また首都圏に位置する学校を調査対象としたのは先行研究の課題に則って筆者が消費社会と高校教育との関係を検討すべきであり、都市部の学校であればその関係をより端的に考察することができるためである。

本報告の課題は夜間定時制課程の教師たちが学校内外の活動にいかなる意味づけをしており、かつそれらがどのような関係にあるのかを明らかにすることである。ただし、学校内外の活動に対する意味づけの連関を遍く検討することは難しい。このため筆者は、学校外の活動であるにもかかわらずX校の教師たちが広く関与している仕事に焦点をまず当て、仕事への意味づけからそれに関わる学校での経験が学校の存立構造全体にどう位置づけられるのか、生徒による意味づけとどのようなズレがあるのかということを主に考察することとした。

3. 分析

先行研究で明らかになった 80 年代の高校教育の特徴は、学業成績を中心とした選抜を行いながらも、日常的な生活態度や課外活動への参加などを生徒同士の微妙な差異化の基準として提示することで、生徒の積極的な学校参加を取り付ける教育実践のあり方であった。このことによってアメリカなどで見られた成績下位者の低位同質化を回避し、有能なブルーカラー労働者を輩出することが可能になっていたというのである(荻谷 1991 など)。一方で、90 年代以降の学校のコンサマトリ化や高校教育からの離脱を明らかにした先行研究が指摘する通り(伊藤 2002、樋田他 2000)、X 校では積極的な学校参加へ向けた指導を行うことが困難であるかのように見える。例えば喫煙指導が常態化していたり、部活動への参加率が低かったりする。また、中学校までに不登校を経験していたり高校中退の経験者が数多くいたりする中で、学校規模が小さく、かつ中退者の多い X 校ではクラスメイト同士の関係は互いに「迷惑をかけない」ことに力点が置かれている。

しかし、X 校の教師たちによる生徒の仕事への意味づけに着目すると別の側面が見えてくる。X 校の教師たちは就職希望者を近隣のハローワークに引率したり、卒業生の就職先からのアルバイト募集を紹介したりして生徒の就労を支援している。ただし、実際には生徒自信が求人を見つけたり、知人を経由して就職先を見つけたりすることが多く、教師の就労支援は限定的な効果しか持っていないことも語られており、教師は主に生徒の話を介して生徒の仕事に接することになる。このような状況の中で、教師たちは仕事が「厳しい大人に揉まれること」や「生活の規律」という観点から生徒の成長にとって重要な意味があることを指摘する。それらは X 校の教育活動、また 90 年代以降の高校教育においては困難になっていた指導に対する代替的な役割を期待されていたのである。さらに、生徒自身は教師の期待するような観点から仕事を始めている訳ではない点も重要である。ゲームやバイクなど趣味のためのお金を稼ぐことがきっかけとなっており、それゆえに学校生活には否定的な効果をもたらすことがしばしばある中でも、教師たちは前述の意味づけをするに至っているのだ。

4. 結論

X 校の事例を分析すると、伝統的な学校の価値と若者文化における価値とは確かに差別化すべきものとして教師にも語られていたが、一方で教育実践においてそれらが不可分であったことに要点があると言えよう。X 校の生徒たちは消費社会に親和的な存在でありながら、教師たちは諸活動への意味づけの中で学校的な価値とも相反しないかたちで生徒たちの成長を捉えていた。このような意味づけを日本型メリトクラシーと関連づけて理解するならば、多様化路線以降の高校教育が消費社会と整合的な関係にあることだけに着目することは、それ以前の高校教育がいかにもノンエリート層の巻き込みを可能にしていたのかという重要な論点を捨象することになってしまう。X 校の事例は多様化路線の直接的な対象とはなっていないがゆえに、日本型メリトクラシーと消費社会との関係が、80 年代以前から不可分な形で進行してきたという可能性を示唆するものでもあり、この点については今後の課題としたい。

参考文献

- 荒川葉, 2009, 『「夢追い」型進路形成の功罪—高校改革の社会学—』, 東信堂。
- 藤田英典, 1991, 「学校化・情報化と人間形成空間の変容—分節型社縁社会からクロスオーバー型趣味縁社会へ—」『現代社会学研究』第四巻, pp1~33。
- 樋田大二郎・耳塚寛明・岩城秀夫・荻谷剛彦編著, 2000, 『高校生文化と進路形成の変容』, 学事出版。
- 伊藤茂樹, 2002, 「青年文化と学校の90年代」『教育社会学研究』第70集, pp89~103。
- 荻谷剛彦, 1991, 『学校・職業・選抜の社会学—高卒就職の日本的メカニズム—』, 東京大学出版会。
- 児美川孝一郎, 2006, 『若者とアイデンティティ』, 法政大学出版局。
- 大多和直樹, 2008, 「若者文化と学校空間—学校の遮蔽性と生徒集団の統合性はどう変容したか—」広田照幸編『若者文化をどうみるか?—日本社会の具体的変動の中に若者文化を定位する—』, アドバンテージサーバー, pp94~119。
- 大多和直樹・山口毅, 2007, 「進路選択と支援—学校存立構造の現在と教育のアカウントビリティ—」本田由紀編『若者の労働と生活世界—彼らはどんな現実を生きているか—』, 大月書店, pp149~184。